

ゾロアスター教徒パーシーのガーハンバール (gahambar) と新年 (No Roz) について

はじめに—問題と目的—

ゾロアスター教徒パーシーの集団構造は、祭司系譜 (Mobed) と平信徒 (Behdin)、5 系譜(カーカー・ダンパールKaka Dhanpal; チャーンダー・ファレドゥーンChanda Faredun ; カーカー・パーランKaka Pahlān ; アーシャー・ファレドゥーンAsha Faredun ; マーヒヤール・ファレドゥーンMahyar Faredun)、バガリアー (Bhagarīa) / 非バガリアーなどの断面で成り立っている¹⁾。このことに加えて、暦の断面でもパーシー集団は、シェンシェイ (Shenshahi/Shahenshahi)、カドミ (Kadmi/Qadimi)、ファスリ (Fasli/Fasli) の三つの下位集団によって構成されている。つまり、これらの三つの下位集団は、それぞれ異なる暦を使用しながら現実の生活を営んでいるのである。

こうした暦にもとづく集団構造は、パーシーにとって最も重要な意味をもっている聖火殿の創設にも関係し、最も聖度の高い聖火(Atas Bahram)については、カドミが、ダーディセス・アータシュ・ベールーム (Dadiseth Atas Bahram)、ペスタンジ・カラバイ・ヴァキル・アータシュ・ベールーム (Pestanji Kalabhai Wakil Atas Bahram)、カワスジ・ベールームジ・バナジ・アーターシューベールーム (Kavasji Beheramji Banaji Atas Bahram) の3つを、シェンシェイが アンジュマン・アーターシュ・ベールーム (Anjuman Atas Bahram)、ワディアジ・アーターシュ・ベールーム (Wadiaji Atas Bahram)、モーディ・アーターシュ・ベールーム (Modi Atas Bahram) の3つをそれぞれ創設し保持してきた²⁾。

本稿では、ゾロアスター教徒パーシー、厳密には、シェンシェイ・パーシーがどのような暦を使用し、その暦にもとづいて、どのような現実の生活を営んできているかについて論述することによって、かれらの時間感覚の一側面を抽出したい。

1 資料と方法

上述の問題に接近するための資料としては、フィールドワークによって蒐集したデータと、グジャラーティー (Gujarati) の史資料を使用する。その中でも特にダストウルジ家 (Dasturji no namgran) ヴァジフダール家 (Vajifdar no namgran) デサイ家 (Desai no namgran) を中心とする過去帳 (namgran)を使用する³⁾。具体的な研究方法は、パーシーの新年 (No Roz) とガーハンバール (gahambar) について考察を行なうことによって、問題の解明に近づいていく。

2 パーシーの暦

ナウサリのパーシーが現在実際に使用している暦は、1年12カ月 (Mah)、1カ月30日 (Roj)、年末に5日間 (Gathas) を加えて365日から構成されている⁴⁾。その暦をガーハンバールおよびそれらの語義、コスモロジー、新年との関連で表記すると下記のようになる。

ガーハンバールの名称	新年後何日目	①Shenshahis ②Kadmis ③Fasli	コスモロジーにおける創造	語義
1 Mai yoizar maya	41-45	①10月1日～5日 ②9月1日～5日 ③4月30日～5月4日	空	中春
2 Mai yois ma	101-105	①11月30日～12月4日 ②10月30日～11月4日 ③6月29日～7月3日	水	中夏
3 Paitishahya れ	176-180	①2月13日～17日 ②1月14日～18日 ③9月12日～16日	大地	穫り入れ
4 Aya rima 還	206-210	①3月15日～19日 ②2月16日～20日 ③10月12日～16日	植物（家畜？の）	帰
5 Mai yairya	286-290	①6月3日～7日 ②5月4日～8日 ③12月31日～1月4日	家畜	中冬
6 Hamaspa maedaya	361-365	①8月17日～21日 ②7月18日～22日 ③3月16日～20日	人間	
No Roz（新年）		①8月22日 ②7月23日 ③3月21日	火	

ところで、ナウサリのパーシーの新年は1998年現在で8月22日に当たり、彼らの新年の日時は一定ではなく、年によって少しずつずれていく。さらに、ガーハンバールという1年に6度行なわれる祝祭の日取りが3様に異なっている。ガーハンバールは、その時節が45、60、75、30、80、75日の間隔からなる周期性をもつこと、またそれらの語義が中春、中夏、穫り入れ、（家畜の）帰還、中冬を表していることなどから明らかのように、本来は季節祭である⁵⁾。それらのガーハンバールは、パーシーにとってきわめて重要な祝祭であり、それへの参加は非常に大事な義務と受けとめられているが、シェンシエイ、カドミ、ファスリによって、それぞれ期日が異なっているのである。例えば、6番目のガーハンバール（Hamaspa maedaya）についてそれを示すと、上の図表からわかるように、それぞれ8月17日～21日、7月18日～22日、3月16日～20日となっている。

ここでは、この暦の中で、新年とガーハンバールを中心に考察することによって、パーシーの時間感覚の一側面を明らかにしていきたい。

3 パーシーの新年とガーハンバール

パーシーの新年とガーハンバールを材料領域として、時間感覚の一側面の抽出を行なうにあたって、ここでは、研究の対象をノウサリのパーシーに限定する。ノウサリでは、パーシーがこの地域やその周辺地域に移動してきて以来、約1世紀にわたって、シェンシェイの暦が使用され、それにもとづいて現実の生活も営まれてきた⁶⁾。

ノウサリのパーシーの新年は1998年現在で、8月22日に当たり、彼らの新年の日時は一定ではなく、年によって少しずつずれていく。

3.1 パーシーの新年

パーシーは、年末の10日間とつづく7日間を、彼らにとって重要な意味をもつアーフリーナガン (Afrinagan) ⁷⁾、サトゥーム (Satum) ⁸⁾、ファロクシュ (Faroxs) ⁹⁾などの儀礼を行いながら過ごす。

8月11日	フラワシ (fravasi) の迎え	
12日	5日間の小聖日 (Panjeh Keh) の第1日	
13日	5日間の小聖日の第2日	
14日	5日間の小聖日の第3日	
15日	5日間の小聖日の第4日	
16日	5日間の小聖日の第5日	
17日	5日間の大聖日 (Panjeh Meh) の第1日	ガーハンバール第1日目
18日	5日間の大聖日の第2日	ガーハンバール第2日目
19日	5日間の大聖日の第3日	ガーハンバール第3日目
20日	5日間の大聖日の第4日	ガーハンバール第4日目
21日	5日間の大聖日の第5日	ガーハンバール第5日目
22日	新年 (Naoroz)	
23日		
24日		
25日		
26日		
27日	小さい新年 (Khordad Sal)	
28日	フラワシの送り (valava ni rat)	

8月11日にフラワシ (fravasi) を迎え、12日から16日の5日間を小聖日 (Panjeh Keh) 17日から21日までの5日間を大聖日 (Panjeh Meh) として、それぞれの日にサトゥーム、アーフリーナガン、ファロクシュを行って過ごし、22日に新年を迎える。その後、27日に小さな新年を祝い、28日にフラワシを送る。

ここで問題となるのは、17日の5日間の大聖日 (Panjeh Meh) の始まりから、21日の5日間の大聖日の終わりの期間は、6番目のガーハンバールと重なっていることであ

る。

このガーハンバールは、他の5つのガーハンバールと同じく、ゾロアスター教徒パーシーが遵守しなければならない祝祭であるが、Mary Boyce をはじめ多数の研究者が指摘してきたように

、そして語義がそれを物語るように、これらのガーハンバールは本来は季節祭である。1年にわたる現実の生活にもとづいて区切られ、祝われてきた重要な祝祭であるし、その伝統の大部分は、ナウサリのパーシーやイラーンに現存するゾロアスター教徒によって今日まで継承されてきている。

3.2 パーシーのガーハンバール

ナウサリのガーハンバールは5日間の祝祭である。5日の重要度は同じであり、5日すべてを祝う形もあるし、そのうちの1日だけを祝う形もある。パーシーであれば誰れでもガーハンバールを祝うことができる。特に、家から死者が出た場合には、その年のガーハンバールはすべて祝う。史料は「ガーハンバールを起こす人はだれでも、70世代遡って先祖の魂を祝福する」(Riv., Unvala, i.435, col. b. line 1)¹¹⁾と記している。ゾロアスター教徒にとっては、定期的な祝祭であること、また、宗教的な意味が強いことが理由で、ガーハンバールを遵守することは功德であると考えられている。(Afringan-i Gahambar 7 :Saddar Bundehesh 50)¹²⁾。これを怠ることは、「橋にゆく (goes to the Bridge) 罪であり、裁きの日にも最も重い罪 (margarzan) として裁かれるものの一つである (Shayast La-Shayast x11 31)¹³⁾。ガーハンバールの儀礼は、祈りと儀礼からなるものと、祈りと儀礼と集会からなるものとの2形態がある。ナウサリにおいては、6度のガーハンバールが前者の形態で行われる。その場合、すべて家族かコミュニティ単位で信託が組まれる。ダストゥールガーハンバール (Dastur Mohalla Gahambar) は「通り」、クタルガーハンバール (Kutar Mohalla Gahambar) は「家族」、ジャムシェドジジジボイガーハンバール (Sir Jamshedji Jijibhoy Gahambar) は「コミュニティ」が単位となって信託を組んでガーハンバールを行ってきている。例えば、Dastur Mohalla Gahambarは150~200名が信託を組んでいる。一人が20ルピーずつ出し合うので、5人家族の場合は100ルピーが出し前となる。信仰告白を終了していない人は半分の10ルピーを出す。死体運搬人は無料となっている。

ゾロアスター教徒の共同体のメンバーの全員が一つはガーハンバールを起こすべきであると考えられているので、仮に本人が年々のガーハンバールを行うだけの資産を持ち合わせていないときは、2年ごと、4年ごと、8年ごとにガーハンバールを行う形をとることもできる。もし、このことをさえやり遂げるだけの資産がない場合は、他人のガーハンバールをいろいろな仕方で援助するようにすべきである。例えば、食べ物や飲み物を差し出す、燃料に一片を差し出す、祈りを差し出すなどのやり方で、他人のガーハンバールに参加するべきである (Afringan-i Gahambar 7)¹⁴⁾。

「もし、貧しいために、ガーハンバールが祝われている場所に出かけないことは、非常に重大な罪であるので、クスティをしている人々 (ゾロアスター教徒) はそのような

人と交際をしてはならないし（それらの人たちから何かを受け取ったり、それらの人たちと食事をしたりしてはならないし）、それらの人の家に入ってはならないし、それらの人たちを自分の家に招いてもいけないし、それらの人を助けてはならないし、それらの人たちの証言を受け入れてはならない」（Rivayats:Saddar-Bd.,end of ch.50）

15)

「だれかが、1年間、ガーハンバールが祝われている場所に出かけないならば、また、（ガーハンバールの食べ物）が用意されているのに、そこに出かけて行って食べることもせず、また、人々とのふれあいに参加しないならば、その人が生涯行ってきた善き行いの1/3はなくなり、1/3の罪が増すであろう。ガーハンバールが祝われている場所に出かけ、ガーハンバールの食べ物を食べ、人々とのふれあいに参加すること以上に善い行いは他にない。」（Rivayats:Saddar-Bd.,90）¹⁶⁾

このように、パーシーはガーハンバールへの参加を決して怠らないようにしなければならない。それらの機会には参加をして自分の善意と祈りで貢献しなければならない。

財産の一部を、たとえば、家、田畑、貯蓄などを、ガーハンバールのために使用していくことは、魂に恩恵を与える行為と考えられている（Afringan-i Gahambar 7.3-15）¹⁷⁾。それぞれのガーハンバールの儀礼において、宗教儀礼の場面と集会の場面で、ガーハンバールを起こした本人の名前と先祖の名前が記念される。

ゾロアスター教徒はガーハンバールの集会に集まり、宗教儀式で祝福された食べ物（チャーシニー ‘Gahambar-ni-casni’ 「試食された食べ物」）に与る。また、この食べ物は、‘yad’ 「死者を記念して食べられたもの」とも呼ばれている。これらの食べ物の一部は、儀礼に参加できない家族や、寝たきり病人にも必ず送り届けられる。6番目のガーハンバールは、一部は祖霊のための祝祭、すなわち **Farvardigan or Panji** と一緒に行われる。祖霊のための祝祭は、元来は旧年の大晦日に行われていたが、サーサーン朝の暦改革の結果、新たに10日が加えられたので、そのうちの5日がガーハンバールと重複するようになった。したがって、祖霊のための祝祭とガーハンバールの祝祭の直後には新年の祝い（**New Year's Day, No Ruz**）、つまり7番目の祝祭がつづくのである。

ところで、イランから移動してきたゾロアスター教徒パーシーは、サーサーン朝第一王朝による暦改革（12ヵ月30日からなる1年360日の年末に5日のガーサー日 **Gatha days** を加えたもの）によって導入された暦を使用してきた。したがって、その結果、次第に彼らの暦の日月は、それまでの暦において規定されていた季節や時節と齟齬をきたさざるをえなくなった。例えば、ゾロアスター教の新年は、伝統的には春であったものが、今日では現実には8月22日になっているのである。

このような不合理を問題として、常に新年が春に来るようにと考えて、19世紀後半にイランにおいてグレゴリオ暦を採用することによって暦改革を行なったのがファスリである。fasliつまり ‘seasonal’ と呼ばれた由縁もここにある。彼らは、その改革によって、伝来の信仰に立ち返ることができるようになったと考え、その暦の採用をゾロアスター教徒に奨励し、1939年、改革派の暦はイランのゾロアスター教徒に採用された¹⁸⁾。

ところで、ナウサリのゾロアスター教徒パーシー、言い換えるとシェンシェイ・パーシーは、そうした暦を採択することなく生活を営んできた。では、ファスリが看取した不合理な部分は、ここにおいてなぜそのままの形で存在してきているのであろうか。

そのことを考える糸口は、小聖日、大聖日で表されている年末の10日間の意義にあると考えられる。つまり、フラワシの迎えと送りを中心としたパーシーの思考様式にあるのである。季節との関連で暦を遵守していくことは弱まり、年末のフラワシの迎えと送りというパーシーの思考にとって最も重要な部分が強調されてきた結果、現代においても、ナウサリでは年々新年の日時が移動し、従来の季節感を弱めた暦が使用されつづけていると考えられる。

おわりに

これまで、パーシーの聖なる火との関連で、フラワシをめぐる思考が非常に重要な位置をしめていることを指摘してきた¹⁹⁾。具体的には、聖なる火を絶やさないためにパーシーが行なってきたマーチ、すなわち、聖なる火に香木を捧げる儀礼は、フラワシのために行なわれること²⁰⁾、また、パーシーの婚姻および養子慣行は、フラワシのための儀礼を絶やさないために行なわれてきている面が強いこと²¹⁾、さらに、ガーハンパールの祝祭も、フラワシのために行なわれ、またそれを行なうことは本人のフラワシを益する行為と考えられていることなどである。

こうしたゾロアスター教的な思考と態度の一面は、例えば、ナムグラン (Namgran) と呼ばれている過去帳にも現われている²²⁾。この過去帳はすべてのパーシーの家に保存されてきていて、サトゥーム、アーフリーナガンやファロクシュといった重要な儀礼において使用され、祭司によって、そこに記載されたすべての名前が呼び起こされるものである。ナムグラン資料から取り出せるように、そこには他の別の形態の過去帳とは異なり、性別年令を問わず、家族親族に属する死者の名前が記載されているだけでなく、知人、友人まで含めて掲載されており、死者のフラワシをめぐるパーシーの思考の一側面がうかがえる。ダストゥールの事例にもとづくくと、男女を含め144名の死者の名前が記録されてきており、それらをすべて呼び上げる。サトゥームの場合は、3度呼び上げる。この過去帳に加えて、月日を同じくして死んだ人の名前、日を同じくして死んだ人の名前、また、その年にナウサリで死んだ人すべての人の名前を呼び上げるのである。祭司は、日の出から祈りを始め、昼食の休憩をはさんで、午後のウジランの刻限 (Uziran Gah 午後3時過ぎ頃) に、その日の最後の祈りを捧げる。このような仕方でも名前を呼び上げることによって、その人のフラワシを祀ることができるのである。この思考と行為はパーシーでは一般的であり、特に年末から新年にかけての10日間はそれらが徹底している。ダストゥールの場合は、夜中の1時に起きて、サトゥーム、アーフリーナガンやファロクシュのための準備に取りかかるのである。

このようなゾロアスター教的な思考との関連で、ナウサリのシェンシェイ・パーシーは現行の暦を従来の使用を修正する形で使用してきていると考えられる。ガーハンパールの祝祭は本来は1日であった。そして、最後のガーハンパール (Hamaspā maedaya) は、フラワシの迎えと送りのためであった。それが10日間、厳密には18日間の祝祭にな

ったのも、パーシーがフラワシのための祝祭を求めたからであると考えられる。ゾロアスター教徒パーシーにとっては、年の終わりにフラワシを迎えて、年の始めにフラワシを送り返すことが重要なのであって、年の終わりとは年の始めが年々一定していることが重要ではないのである。

注

- 1) 拙論「ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火と集団構造」1997年12月『宗教研究』71巻3輯 pp.149-170 参照。ゾロアスター教徒パーシーの聖なる火の保持の場面において、ノウサリで最も等級の高い聖なる火アータシュ・ベーラーム (Atas Bahram) のマーチは、祭司系譜を出自とするパーシーが中心となっ
て行われてきていること、個人の断面でも集団の断面でも、祭司系譜を出自とする特定の家族(姓)が、また、祭司系譜の中でもバガリアー (Bhagaria) と呼ばれる特定の系譜に属する集団が、アータシュ・ベーラームに香木を捧げることによって聖なる火は永続的に燃えつづけてきていることを取り出している。
- 2) 拙論「ノウサリ・パーシー(The Parsis In Navsari) の研究」1981年6月『西日本宗教学雑誌』第6号 pp.12-47拙論「ゾロアスター教における聖なる火ーノウサリの事例を中心としてー」1983年1月『哲学年報』第42輯 pp.29-53 参照
- 3) 本稿では、紙数の関係でnamgran関係の資料を具体的に提示することができなかった。namgranに関する論究は別の機会にゆずりたい。

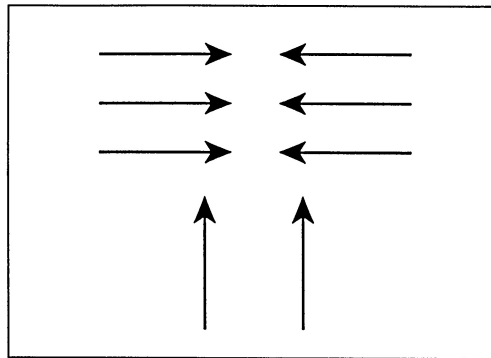
4) シェンシエイ・パーシー歴 (1998年8月～9月の一部)

Fravardin (S) Ardibehesht (K) 1368 Y.Z. ફરવર્દીન (શે.) અર્દીબેશ્ત (ક.) ૧૩૬૮ ય.ઝ.			August - September 1998 ઓગસ્ટ - સપ્ટેમ્બર ૧૯૯૮		
રવિ	Aneran 20 અનેરાંન	Bahman 23 બેહમન	Adar 30 આદર	● Meher 6 મેહેર	Daepdin 13 દેપદીન
સોમ		Ardibehesht 24 અર્દીબેશ્ત	Ava 31 આવાં	Srosh 7 સરોશ	Din 14 દીન
મંગળ		Shehrevan 25 શહેરેવર	Khorshed 1 ખોરશેદ	Rashna 8 રશને	Ashishvanh 15 અશીશવંધ
બુધ		Asfandarmad 26 અસ્ફંદાર્મદ	Mohor 2 મોહોર	Fravardin 9 ફરવર્દીન	Ashtad 16 આશતાદ
ગુરુ		Khordad 27 ખોરદાદ	Tir 3 તીર	Behram 10 બેહેરાંમ	Asman 17 આસમાન
શુક્ર		Amardad 28 અમરદાદ	Gosh 4 ગોશ	Ram 11 રાંમ	Zamyad 18 ઝમીઆદ
શનિ	Hormazd 22 હોરમઝદ	Daepadar 29 દેપઆદર	Daepmeher 5 દેપમેહેર	Govad 12 ગોવાદ	Marespand 19 મારેસપંદ

૨૩ શેહનશાહી નવું વર્ષ ૧૩૬૮, ૨૩ ચાંદરાત, ૨૪ રપીથવન ઈજવાનો દીવસ, ૨૬ ગણેશ ચતુરથી, ૨૭ શે. ખોરદાદ સાલ, ૧ ક. મએદીઓશહેમ ગંધબાર, ૬ પુનમ, ૮ ફરવરદીઆનનુ જશન, ૧૦ કુકાદારૂનો મરણ દિવસ (બાજ). ૧

- 5) Christian Bartholomae は、“Altiranisches Worterbuch”1961 pp.1287-1288 Berlinにおいて、yairyāをその語義としている。D.N.MacKenzieは“A Concise Pahlavi Dictionar”1971 London p.34 において、gahanbarを‘the six divisions of the year, the five-day festivals celebrated at the end of these’としている。また、Visparad(1.2)およびBundehesh (chap.xxv)もgahanbarを季節祭として位置づけている。
- 6) 拙論「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」1983年9月 『宗教研究』 第57巻257 第2輯 pp.81-101 参照。また、シェンシエイとカドミとの緊張関係については、「ナオサリ・パーシー(The Parsis In Navsari) の研究」1981年6月 『西日本宗教学雑誌』第6号 pp.37-38を参照。
- 5) アーフリナガンは、zoti/joti あるいはraspi/rathwi/atra-vakhshiと呼ばれる二人の祭司によって行われる。zotiは儀礼を司式する祭司であり、raspiはzotiを補助し、火に香木を捧げる役割を負う。アーフリーナガンの祈りは、Dibache/Afrinagan/Pazendから成っている。Dibacheは、zoti が唱えられるべきアーフリーナガンの名称、アーフリーナガンの祈りの捧げられる人物名、アーフリーナガンの儀礼を行う人物名を呼び上げる部分である。前者は、khshnuman(joy,satisfaction,pleasureの意)の語を伴い、“khshnaothra Ahurahe Mazdao,Ashem Vohu…”「私はアフラマズダーの栄光を増すためにこれを唱えます(行います)」で始まるように、アフラマズダーやその他の神格(Yazata)の栄光

を讃える祈りである。また、Dibacheはyad(remebrance、の意)を、“aidar yad bad” 「誰々が記念される」という形で式文の中に伴う。これは、アーフリーナガーンの儀礼が捧げられる人物を呼び上げる部分で使用される。ここでは、生者も死者も記念されるのであるが、前者の場合はzindeh-ravan「生きている人の魂のために」、後者の場合はanousheh-ravan「死んだ人の不死の魂のために」と唱される。例えば、Jamshedという人物が生きている場合は、“namchishti zindeh-ravan behedin Jamshed behedin Rustom aidar yad bad” 「生きている魂の持ち主であり、ルスタムの息子であるジャムシェドがここで記念される」のように、また当人が死んでいる場合は、“namchishti anousheh-ravan behedin Jamshed behedin Rustom aidar yad bad anousheh-ravan ravani” 「不死の魂の持ち主でルスタムの息子ジャムシェドがここで記念される」のように式文が唱される。儀礼を行う人物名は、“farmayashna behedin Noshervanjee mazdayasni beresad” 「この儀礼はマズダヤスナを信仰するノッシルワンジによって行われる。ノッシルワンジへ神のご加護が来たらんことを」のように唱される。Afrinaganは、冒頭にyatha-ahu-vairyoの祈りが4度唱えられ、次にgahの祈りが続き、その後に神格へのkhshnumanの式文が唱えられた後に来る祈りである。ガーハンバールの場合は、6つのガーハンバールの期日、それらの期日と結びつけられている神の創造、特に、コスモロジーとの関連で天空、水、大地、植物、家畜、人間の創造に言及している部分が祈りの特徴である。Afrinaganに捧げられる供物はmyazdaと呼ばれている。myazdaとしては、果物、花、ワイン、ミルクなどが供えられる。myazdaは、フラワシへの捧げ物であり (Fravardin Yasht: Yasht xiii, 64)、アフラマズダーやアシャへの捧げ物でもある (Gatha. Ha xxxlv, 3)。myazdaは食べることができるが、その行為をchashni(tasting)という。Yasna(Ha viii, 2)は、chashniを行うことができるのは、アシャと善行を守ってきた人だけと規定している。ワイン (madhoぶどうの汁／蜂蜜／薬) は、Vendidad(v.52 ; xlv.17)が示すように、分娩時の妊婦の栄養であり、祭司の滋養剤であった。アヴェスターの時代には禁酒の慣行はなかった。パフラヴィーの時代にあっても、ワインの使用は許可されていたが、同時に節制が説かれている (Dadistani-dini ch.l, li: Dinkard vol.1 p.4)。Bundehesh(chap.xxvii.24)は、それぞれの神格には特別の花が捧げられていたことを記している。アフラマズダーには、ジャスミン (murd yasumin) が捧げられるという。アーフリーナガンには8本の花が下図のように供えられ、zotiとraspiは下方の花を一本ずつもったままAfrinaganの祈りを唱える。上方の3本ずつの花々は、祈りの中で、humata (善思) hukhta (善言) hvarshta (善行) を2度唱えるときに、それぞれの言葉に合わせて1本ずつ手にとってかかげる。1回目に右手側を、2回目に左手側を使用する。



- 8) サトゥームは、*satum*は‘hymn of praise’という語義が示すように、死者の榮譽のために、食事のときに唱えられる祈りである。サトゥームの祈りの主要部分は、*yasna.ha.xxvi.1* であり、その部分はすべてのフラワシの賛美で構成されている。アフラマズダー、アメシヤスペンタ、マズダヤスナを信仰していた人々、最初の人間 (*gayomard*)、ゾロアスター、グシュターズプ王などをはじめとして、男女大人子供を問わずすべての信仰深い人々のフラワシが呼び起こされ、賛美される。それにつづいて、「私の善思、善言、善行が神聖な存在のフラワシを喜ばせますように」という祈りが唱えられる。
- 9) ファロクシュは、サトゥームと *Farvardin Yasht* を唱えることからなっている。主眼は、フラワシのための祈りである。
- 10) Mary Boyce.,1977 *A Persian Stronghold Of Zoroastrianism*. Oxford. pp.164-235
Mary Boyce.,1970 ‘On the calendar of Zoroastrian feast’,*BSOAS*,xxx111.3. pp.513-539
- 11) Ervad B.N.Dhabhar.,1932 *The Persian Rivayats Of Hormazyar Framarz*. pp.497-578
- 12) Ervad B.N.Dhabhar.,1963 *Afringan-i Gahambar*. pp.287-307
- 13) Modi,J.J.1937 *The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees*. Bombay p.449
- 14) Ervad B.N.Dhabhar.,1963 op.cit.,
- 15) Ervad B.N.Dhabhar.,1963 op.cit.,
- 16) Ervad B.N.Dhabhar.,1963 op.cit.,
- 17) Ervad B.N.Dhabhar.,1963 op.cit.,
- 18) Mary Boyce.,1970 ‘On the calendar of Zoroastrian feast’, *BSOAS*,xxx111.3. pp.513-539
- 19) 拙論「聖なる火をめぐるゾロアスター教の宗教儀礼」 1983年9月『宗教研究』 第57巻257 第2輯 pp.81-101 参照。聖なる火に香木を捧げる行為(*maci*)と、集団に共有されている祝祭(*jasan*) に関するフィールドワークのデータ及び *Gujarati* 文献の分析から、ゾロアスター教徒がこれらの儀礼をとおして死者の靈魂(*Fravasi*) を供養しようとする態度を取り出し、この態度に高い価値づけがなさ

れている事実を指摘した。さらに、それらの儀礼は集団全体や親族構造を固める方向に機能するだけでなく、集団をより細かな下位集団のレベルに割り、分化させる機能をも果たしている姿を示した。

- 20) 拙論「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と名前の記憶について」1996年3月『西日本宗教学雑誌』第18号 pp.13-25 参照。パーシーは姓名を記憶しようとする思考が強く、姓名が永続的に記憶される種々の仕方を存在させてきている。聖なる火に燃料を加える行為の分担、信託財産制度 (Trust トラスト) による聖火殿、鳥葬の塔などの創設、清浄儀礼 (Barasnom) の遵守などがその主要なものである。命名されたものの記憶を死者の記憶の断面で取り出してみると、死者の記憶は、クトゥンプ (父系血縁集団) の規模で死者を記憶する仕方と、クトゥンプの下位集団の規模で死者を記憶する仕方が存在する。前者は男子名だけを記憶し、後者は男女名を記憶する。死者の記憶に関しては、ジンデレワン (zinderavan) の儀礼が行われることがある。これは死後一年間の間になされるべき全ての儀礼を存命中に行うものである。この仕方によっても個の名前は記憶の対象となりうる。
- 21) 拙論「ゾロアスター教徒パーシーにおける聖なる火と家族」1995年7月『西日本宗教学雑誌』第17号 pp.1-15 参照。Disa-Pothi と Vanshavalichopdoの二史料から婚姻の事例を全て抽出し、それをKutumbを単位として分析すると、いとこ婚、natrun, さらにStur, Cagar, Enokenなどの婚姻形態が示すように、パーシーが死者供養とフラワシの供養との関連で婚姻を行ってきている側面が明らかになった。
- 22) 拙論『ゾロアスター教における聖なる火とパーラク (養子慣行) について』1984年3月『西日本宗教学雑誌』第7号 pp.78-87 参照。家族を単位として展開される養子慣行 (Palak) の具体的事例の分析によると、養取の場面で父系的因子、長子相続の慣習が色濃く観察され、それがゾロアスター教徒の現実の行動を強く規定している事実が存在する。パーシーの養子慣行は原則として財産相続を伴わず、聖なる火に香木を捧げる行為をとおして死者の霊の供養を行うことを義務とする形態をとる。